ロボット手術が溶け込む日常
― 藤田医科大学での研修 ―

新潟大学消化器・一般外科下部消化管グループ
田島陽介

二〇一八年十月より藤田医科大学総合消化器外科に国内留学させていただいております。留学に至った経緯や現況についてご報告いたします。

きっかけは二〇一七年日本臨床外科学会の国内外科研修制度への応募でした。全国約一〇〇施設から希望の施設に短期研修できる制度で、なぜか私に応募の打診があり、面倒くさいなと思いながら研修候補施設の名簿を眺めていました。折しも新潟大学でロボット直腸手術立ち上げが画策されており、ふと目に留まったのがロボット手術で有名な藤田医科大学の名でした。それまで私はロボット手術には無縁でしたので、たまには別世界を見るのも気分転換になると軽い気持ちで応募し、二〇一七年九月に藤田医科大学で一週間研修をさせていただきました。しかし、そこで全く異次元のロボット手術を目の当たりにして大変な衝撃を受けました。当時ロボット直腸手術はまだ自費診療でしたが、ロボット直腸手術のパイオニアである花井恒一教授より「ロボット手術は近いうちに必ず標準治療になる」とのお言葉を頂きました。標準治療になってからロボット手術を勉強し始めるようでは遅いと感じ、一方では標準治療にならず廃れるかもしれないとの一抹の不安も感じつつ、短期研修後すぐに藤田医科大学留学を決意しました。同大学宇山一朗教授・花井教授のご厚意および当科若井俊文教授・医局員の方々のご尽力で留学許可を頂いた矢先にロボット手術の保険収載が大幅に拡大され、しかも留学の必要条件である学位も同時期に取得させていただき、運よく最短距離でロボット手術を勉強する状況が整いました。二〇一八年十月より同大学総合消化器外科下部消化管グループで研修

させていただいています。

ロボット直腸手術はもともと自費診療であったことから、藤田医科大学では術者を花井先生および勝野秀稔先生に固定して安全性を担保していました。私が研修を開始した時期もロボット直腸手術が保険収載されて間もない頃で、執刀医固定の方針は変わっていませんでした。私はひたすらロボット直腸手術の助手を担当して修練し、ロボット手術関連の学会発表を重ねて知識を蓄積し、通常業務を粛々とこなし、科学研究費を獲得して大腸癌細菌叢研究を立ち上げつつ、ロボット手術執刀の機会を窺う日々が続きました。二〇一九年四月ついにda Vinci Xiでの直腸癌手術初執刀の機会を頂いた時には、うれしさより緊張が勝っていたのをはっきりと覚えています。ロボット手術の利点に多関節機能や安定したカメラワークなどの謳い文句がありますが、一例目からロボットを使いこなせるはずもなく、アームはこんがらかり、カメラは天地がひっくり返り、場の展開もままならず、その都度ダブルコンソールで花井先生に修正していただき、ほぼ操り人形状態でした。唯一da Vinciの利点を活かせたのは、極度の緊張による手の震えが手振れ補正機能によりキャンセルされていたことくらいです。その後二〇二〇年六月現在で側方郭清四例を含む二十例超のロボット直腸手術執刀を経験させていただきました。最近ようやく骨盤内の狭い術野でストレスなく緻密な操作が行えるロボットの真価を実感し始めています。しかし、根治性と機能温存が両立する切離・剥離ラインの見極めはなお難しく、勉強と反省の日々を過ごしています。

ロボット直腸手術はまだEvidenceが乏しく、保険収載されたとはいえ標準治療になるかどうかは未知数です。藤田医科大学が参加する直腸癌および結腸癌のロボット手術の多施設共同前向き研究において私も研究担当医に選定いただき、ロボット大腸手術のEvidence確立をめざしています。ロボット直腸手術は週一－三例あり、特別な手術という意識はもはやまったくありません。藤田医科大学で習得したロボット手術の技術と経験が新潟でも活かせるよう、引き続き臨床ならびに研究に研鑽を続けていきたいと存じます。

（平成十九年入会）